

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19592244

研究課題名（和文） 総義歯の咬合様式選択のためのガイドラインの構築

研究課題名（英文） Establishment of guideline for occlusal scheme in complete denture

研究代表者

永尾 寛 (NAGAO KAN)

徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・准教授

研究者番号：30227988

研究代表者の専門分野：歯科補綴学

科研費の分科・細目：歯学・補綴理工系歯学

キーワード：歯学、総義歯、咬合様式

### 1. 研究計画の概要

リングライズド・オクルージョン、フルバランスド・オクルージョンの両咬合様式ともに長所・短所があり、咬合様式の選択にあたっては、研究者、臨床家の間で意見が分かれているが、概ね顎堤条件によってどちらを選択するか決定しているのが現状である。しかし、臨床では、顎堤条件ばかりでなく、生活習慣、食習慣、口腔機能、性別、個性、QOLなどの条件が複雑に存在し、これらを考慮するとどちらの咬合様式を選択するか明確な指標がなく、迷うことが多い。これまでの報告では、QOLを含めた患者主体の評価がほとんどないのが現状である。

そこで、QOL、義歯満足度などの患者の主観的な評価と栄養状態、咀嚼状態、咬合など客観的な評価を総合的に判断し、咬合様式選択の指標を得ることとした。

### 2. 研究の進捗状況

本研究では、咬合様式と患者の客観的、主観的な評価との関係を調査するために、上下無歯顎患者に2種類の咬合様式（フルバランスド・オクルージョンとリングライズド・オクルージョン）を付与した全部床義歯を装着し、それぞれ1カ月間および3カ月間使用したあとの、主観的な評価（補綴治療の難易度を測定するプロトコル JSP Version 1.04）ならびに客観的な評価（咬合状態、顎堤条件）を行っている。

2008年度までは、実験期間が長すぎた（開始から終了まで約12ヶ月）ため被験者が思うように集まらなかった。また、実験協力の同意を得られたものの、上記と同じ理由で途中リタイア（病気等のため）する患者も数名

に上った。その結果、2008年度末までに実験を終了した被験者は2名のみであった。

被験者が集まらなかったことを鑑み、2009年度は装着3ヶ月後の評価を行わず、実験期間を義歯調整終了よりおよそ3ヶ月（実験開始から約5ヶ月）に修正した。その結果、8名（男性：3名、女性：5名）の被験者から実験参加の同意を得ることができた。ただし、女性3名は義歯を装着し調整を行っている最中であるが、下顎位がやや不安定であることから、最終的に被験者として採用するか否かは今後の経過によって決定する。

また、新規調査項目として2009年度から①歯槽頂間線角度の測定、②顎堤容積の測定、③食事に関するアンケート（好きな食べ物、よく食べる食べ物、食事に要する時間、嚥下までの咀嚼回数など）の3項目を追加した。現在の進捗状況（本年度の被験者）は、義歯製作中4名、装着義歯調整中3名、リタイア1名である。昨年までの被験者数を合わせると、総数は9名である。被験者数が少ないので、まだ統計学的な検討には至っていない。

### 3. 現在までの達成度

④遅れている。

（理由）

2007、2008年度は実験条件、方法の確立、被験者の獲得などで試行錯誤していた。とくに、被験者として適切な患者（重篤な全身疾患がなく、長期にわたって通院できる上下無歯顎患者）の絶対数が少ない上に、実験期間が約12ヶ月と長期にわたることが協力患者獲得に高い障害となった。2009年度後半は、上記のように実験期間を短縮することによ

り一挙に多くの被験者の同意が得られた。

#### 4. 今後の研究の推進方策

2009 年度に実験期間を短縮してからは、以前より順調に被験者の協力が得られるようになったものの、まだ被験者は不足している。被験者を増やすためには、さらに実験期間を短縮する必要がある。技工士の協力の下、義歯装着までの期間を短縮する工夫を行い、協力患者の増加、リタイヤする患者の減少に努めたい。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 0 件)

〔学会発表〕 (計 0 件)

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕